

全体討議

まとめと司会 上田閑照

(前半割愛)

上田閑照 最後の番として簡単になにか言いまして、それからいくつか質問がありましたので、答えのヒントになることを申したいと思います。さつき西村さんは人間も自然であるとおっしゃいました。ところが渡辺さんは、人間は自然でなくてよかったというようなことを言われた。おそらく両方本当だろうと思います。ただ、どこで言っているかということが問題だと思います。そういうことを見るためにも、人間として生きるといふことがどうなっているかということとを単純な形で理解できるような仕方がないか。そういうわけで生命／生／いのちということを考えてみました。人間が生きるといふことを構造化して見る場合、基本的に

そのように見たいと思っています。構造そのものの中に問題と問題の解決の方向を見ることができるような仕方でも考えてみたらどうなるか、と。

生命、生活、人生、いのち、これは日本語だから言葉が別々にあつてそのように言えるという点があり、ドイツ語で言えば全部を通して *Leben* で、英語では *live* ですが、事態そのものは、例えば動物的 *Leben* とか、人間的 *Leben* とか、スピリチュアルな *Leben* というふうには言いがたいことが出来るものですね。いずれにしても、三つの事態が事態として分けられて、その上で連関がどう生きられるか、それが生きる質の問題になると思う。もし全体を自然ということを通して言えれば、やはり言葉としては自然、不自然、それから超

自然、ないし非自然と言いたい。あらずの非です。非自然という言葉をはつきり用いられたのは西谷先生です。それは生命／生／いのちと基本的にはパラレルと言っていてと思います。人間は人間であるゆえんのところで見れば不自然である、と私は基本的に考えます。不自然の一番大きなところは意識、それも意識が自意識になるところ、「我」ということが言える、そこにあると見ます。そして不自然という言葉が示すように、何らかの仕方で改められて自然が回復されなければならぬ、ということがあります。どのような自然の回復か、それは単に回復ということか、これが大きな問題になりますね。生活だとか技術だとかの中に含まれているような不自然から回復できるサイクルと、自意識、あるいは「我」というところで起こってくる超不自然から回復されるサイクルは、質の違うサイクルです。しかし二つのサイクルは運動しています。

その超不自然まで含めて回復できるサイクルは、超自然とか非自然といわれる、そこまでを含んでいなければいけない。それは伝統的にはだいたい「宗教」とい

うことで成立していたことですが、現代では「宗教」ということがわからなくなっているのが一般のようです。

生命／生／いのちにしても、自然／不自然／超自然・非自然にしても、生きる連関の全体であり、同時に全体の連関がこめられています。そして、そもそも全体というのは、「全体は全体よりも大きい」、私たちが全体と見るもの、考えているものよりも限りなく大きい、ということがあります。自分が知っていることだけが全体ではない、というセンスが必要です。このセンスは、自分が考えていることだけではどうにもならない問題に現にぶつかるところで養われることが多いと思います。これは知識や認識の問題ではなく、センスの事柄ですが、このセンスが一般に失われつつあるように見えます。

それで、二、三、質問がありました。まず渡辺さんの問題は、他者の問題ですね。これは、場所ということと結び付いたこととして見えています。他者ということはことさらに問題には出しませんが、こ

で西田の考えに添って考えて、場所という考え方の中に、場所と「場所に於てあるもの」と、これをセットにして考えています。それはどちらからでも全体の事態を究めていくことができる、と思います。今「私」ということを言いましたけれども、そのとき、必ず他者との関わりが同時に問題になってくる。西田の言い方では「私と汝という自覚」これはおもしろい言い方だと思つのです。どうしてかという、「私」が場所に於てある、場所に開かれるということと結び付いていくわけです。それから他者、これはよく考えてみると、単純な問題ではない。しかし最終的にどこで他者と見えるかという、「私」と言うその自分ではないということ。自分でないということが最終的にどこで言えるかという問題になります。例えば、日本ということとで考えると、一人の日本人ということと通じるところができてきますね。そこでは、絶対に他であるという決め手は出てこない。あるいは人間ということとで考えてもそうです。同じ人間だということ言えば、絶対に他であるということとは出てこない。どこで他者と

いうことができる決め手があるかという、やはり最終的には、これは西田から学んでわたしの仕方で見ていることなんです、唯一絶対の個——絶対者という意味ではなく、かけがえのない「個」というところで、「個と個」として対し合うということと、互いに絶対の他であるということが同時に成立します。

そのような「唯一絶対の個」ということは、世界中でということだけでは成立しない。やはり、「限りない開け」、西田ですと「絶対無」という言葉で言うところ、宗教では単純に昔から言われている「一人生まれ、一人死す」という、その生死ということを通して初めて本当にかげがえのない絶対の一人ということが自覚されて、そのときに、「個は個に対して個である」、西田の言葉で言えばそうなる。「唯一の個と唯一の個」として他者への限りない親しみが成立します。私たちも経験的には、親しい人が亡くなった時、絶対に距てられたという感じと限りない親しみが同時に感じられていますね。それ以前はどこかあいまいなと

ころがある。ふつうはそれで生きていられるんです。しかし生死において避けられない問題に出会うと思いません。

次に規範の問題ですが、規範はいろいろある。客観的に言えばまず法がありますね。人間社会にとっては、法律と言えます。それから人間としての本性と結び付いたところで言えば、道徳です。しかしそれだけでない、それに尽きないところがあります。法ですと、泥棒しても自分の人権を主張できる、そういう性格の規範です。しかし道徳の場合には同じ規範でも、非常に内面化していますから、自分で改心して、改めなければ人格として自分を確立できない。法の性質がだんだん変わってくると思います。さらにそれだけでは済まないのです、泥棒しなくても、生きていくということがそのままですいろいろなものを奪いながら生きていくのだ、そういうセンスになると、もっと高い、もっと深い、神の掟とか、仏法とか、そういうことが言われるところが出てきます。問題は様々な法の間の制約関係だと思えます。もう一つ別の種類の例をあげますと、

世界内の個々の事柄を通じるもの、これは知識として言えば科学、あるいは実践として言えば技術でいいと思います。しかし、世界全体が問題になるときは、学としては哲学だし、制作的には技術でなくて芸術になると思えます。

そしてもう一つ、「限らない開け」まで含めて人間の存在が問題になるときは、宗教ということになります。そしてそれぞれ固有の相対的な自立性をもっているけれども、そこにはつきりした制約関係がなければだめです。法は道徳律によって制約されなければいけない、ところが、悪いことをした人は大体逆に考えますよね。道徳には背いているかも知れないけれど法律には背いていない、道義的には問題かも知れないけれど、法には触れていないと、逆に考えるんですね。逆に考えるような人間が出てくるという、そういうことも人間の構造の中に含まれている。それをもう一度ひるがえすためには、単なる自然、不自然のサイクルでは不可能だと思つ。ですから、昔からの言葉でいうと、超自然ということがどうしても出てくる。超自然によ

って全体が制約されたときには、単純にこれを再び自然と言うことも出来るでしょう。高次の自然、あるいは「じねん」と言ってもいいです。いずれにしてもそれだけの問題を含めたこととして言われなければならぬ。ですから自然という言葉はある意味であまいな言葉なんです。

自然というといふもののような、そういうニュアンスを最初からもっている、しかし、本当は必ずしもそうでないと思います。不自然ということ自身が自然から起こってくるということがあるし、クローン人間なんかでもそうですよね。わたしは単純にそれは不自然である、と言いたいと思います。そう見た上でそれについてどう関わるかという問題になってくるわけですね。クローン人間だけが不自然というんじゃない、人間のしていることは最初から不自然であると思います。しかし、これは程度の問題です。それが自然に回復されるサイクルの範囲内でなく、それを越えたかということが問題なんです。越えた場合、やはり従来の考え方を変えなくてはならない。越えた場合には、昔から宗

教という言葉で言われていた人間のあり方、考え方が、もう一度意味をもつというふうに人間が自覚してくる可能性があると思います。ただ古い宗教の言葉で言えればいいというのじゃなくて、こういう事態全体を自覚することによって、古い宗教でああいうふうに言っていたことはなるほどこういうことだなというように、現在の中でわかり直すということになれば、一つの道があるように思います。

(以下割愛)